

復活節第六主日 2014.5.25

聖霊を与える約束

ヨハネ 14 章 15-21 節

14:15 「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。

14:16 わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。

14:17 この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内からである。

14:18 わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。

14:19 しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。

14:20 かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内におることが、あなたがたに分かる。

14:21 わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す。」

きょうの福音は先週 14 章前半からの続きで 14 章の後半となります。「聖霊を与える約束」と見出しのついた箇所ですが、テキストには聖霊ということばはなく、弁護者、真理の霊と語られているのでちょっと注意が必要になります。

ところで、朗読していて気になることがありました。「わたし、あなたがた」が繰り返してでてきます。数えてみたら「わたし」が 16 回もありました。

また「あなたがた」は12回でてきます。わたし（=イエス）がいなくなった後の指示をあなたがた（=弟子たち）にしている箇所ですので強調しているからでしょうか。（ギリシア語は人称代名詞をつかわなくても誰を指しているのかはわかるので原文を調べてみたら原文でも同じように繰り返されています）

<みなしごにはしない>

「いい子にしていたらほうびをあげよう」という言い方があります。この意味も誰が誰にいうのかによって意味が違ってきます。お母さんが子どもにいう場合、誘拐犯が子どもに向かって言っている場合、ずいぶんと意味合いがちがいます。ところで、無条件の愛を説いたイエスはこのような言い回しをするでしょうか。しないはずです。放蕩の限りをつくした息子を父親はそのまま受けいれました。強盗に襲われ倒れている人を通りがかりのサマリア人は助けました。見返りを求めない無償の行いをイエスは弟子たちに教えてきました。でも、テキストを見るとわたしの掟を守ったら弁護者（聖霊）を送り守ってあげる、という意味にとれないこともありません。さきほど集会祈祷でも祈りましたがイエスの約束は「わたしたちをみなしごにしない」という点にあります。掟＝「互いに愛し合いなさい」を守ることと聖霊を送ることは直接の関係はありません。「なにになにしたからこうなる」では「律法を守ればよし」とする律法学者たちと同じになってしまいます。

<後継者としての聖霊>

聖霊っていまいちピンとこない、聖霊ってよくわからないという声もよく聞きます。聖霊を強調する宗派に対してひややかな目を向けるクリスチャンも少なくはありません。一人ひとりの個人に聖霊が現れる、いやそうではなく、聖霊は教会に現れる（掟を守る教会、互いに愛し合っている共同体に現れる）という対立点もあるようです。たしかに霊に満ちた（聖霊に満たされた）礼拝があります。その一方でいったい聖霊はどこに働いているの？と思

えるような教会共同体もあります。キリスト教は人格神を拝む宗教でキリスト教の神は法人格の神ではありません。神やイエスはこじん個人に現れるが、聖霊は共同体に現れるというのはおかしい主張でしょう。イエスは自分の後継者として「聖霊」を指名しましたが、現代日本のキリスト教界をみると聖霊理解に関して混乱しているように思えます。

<自然と啓示>

遠い山の端に沈む夕日を見て、また風に揺れる梢の音に、よせてはかえず波をみて、創造主をおもい、偉大さに驚き、そして感謝します。神学的にはこのような感情を自然啓示といい、自然の中に現れる創造神の現れとします。日本人は一般的に自然にたいしての感情が豊かです。自然の中に神秘を感じるという人は多いとおもいます。

パレスチナ地方に起源をもつキリスト教は啓示宗教といわれます。啓示、つまり神の自己啓示をベースにおきます。いいかえれば、聖書に証言されている神、イエス、聖霊を。キリストの死と蘇り、イエスの十字架と復活を中心にキリスト教を位置づけます。基本的には自然、神の創造された大地、宇宙の神秘より聖書が、聖書に啓示されている事柄が優先されます。

戦後まもなく、木村末松牧師がアメリカに行きナイアガラの滝を観光していた時、後ろに立った大柄なアメリカ人が「おい。ジャップ。お前の国にはこんな立派な物はないだろう！」といいました。木村末松は「なーに。これは俺のお父つあんの庭だよ」とかえしました。驚いたアメリカ人は「お前はもしや、この地域のインディアンの酋長の息子なのか？」木村は「いや、私は日本の牧師だ」二度びっくりした彼は、早速自分の町の教会に招いて「ナイアガラの滝の持ち主の息子来る」と町中に看板を立てました。その集会は大盛況だったそうです。

<ところかわれば>

掟を守る、掟とはイエスが与えた新しい掟をさしています。

13:34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

ここで、あなたがたを教会員ととれば、教会の中で仲良くしなさいという意味になります。あなたがたをもっと広く取ればまた別の意味になります。この「あなたがた」をどう解釈するかによってイエスの「新しい掟」の意味合いは違ってきます。

同じ説教者でも相手によって「あなたがた」の解釈を変えて話すこともあるでしょう。教会内部でいさかひがあれば、互いに愛し合えとイエスはいつているとって説教するでしょうし、公民館で話す機会があれば、好きな人も苦手な人、いやな相手もあるでしょう、それが人間です。でもそれぞれに適切な距離おいて付き合うことが賢い付き合いです、というような話になるかもしれません。

<聖霊はいずこに>

14:20 かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内におることが、あなたがたに分かる。

わたし、あなたがたがこの短い文章の中にそれぞれ3回もでてきます。ある人はこのことの説明に困って、真っ赤に燃えている鉄をさし、「鉄は火の中にある、火は鉄の中にある。わからなければ触ってみろ！と言い放ちました。乱暴ないい方ですが、真理は体験を通じて悟るものです。信じる者には確かに与えられます。これを媒介するのが聖霊です。

聖霊とは、みことばと祈り、信者との交わりにおいて神さまのいのちの交流を時々刻々通わせる働きです。みなさまの上に聖霊のゆたかな祝福がありますように。